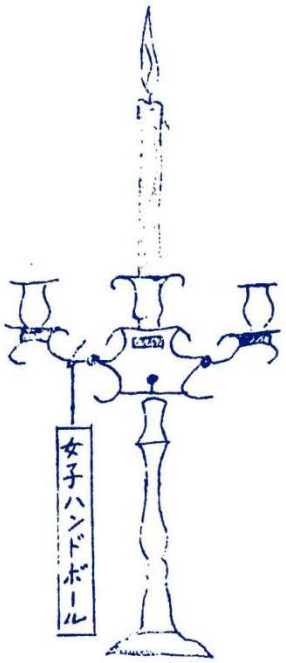
厳しい合宿でした。人数は、八人（後は、小早川、久保田、佐々見、京谷、佐藤）のなかったけれどもがんばりぬき一致団結して頑張れる合宿は苦一週間を過せたことは、大変有意義な事でした。人数が少なくて練習にこたえ苦しかったが、休憩時間に家庭科室の横でぶっ倒れて涼風とし〳〵〳〵味わったのも忘れられません。苦しいばかりでなく、第一日目、前の宿直室で小久保先生や衛藤先生、それも中江さんを交えた雑談それに電話の事も今でも思い出すと小き出します。二日目からは、二人の教室で、したが、有の練習にもめげず夜は楽で、男子の夫婦を交えてトランプをしたり、恋愛いをしたりして充分楽しかった。キーパーとしての思い出はそれ位にして、フォワードに変ってからの事を書こうと思うのですが、三年になってやり始めて試合経験もツいし、フォワード一年生が、律そうなはをとくのし何でもいのでいめます。これからのハンドボールの隆盛を祈り、高津ハンドボール部の活躍を期待しつつ……！。

完

私のクラブ生活

佐々見淑子

私がハンドボール部に入部したのは、一年生の二学期も終りに近い十二月だった。その頃は一学期や、二学期の始めとは違って、何か運動クラブに入って、派手に暴れたいという強い欲望も、幾分薄れ、それ迄あちらこちらのクラブを転々として来ていたのだけに、慎重に、今度こそ落着けるクラブに入りたいという願いも強かった。当時ハンドボール部は部員が他の女子運動クラブに比して少なく、又、一応校内大会という競技を通して、勧誘された私であった為か、待遇も良かったし、又ハンドボールというスポーツ自体の持つスケールの大きさに惹せられて、練習は厳しかったけれど、さ程苦にはならなかった。それでも、入って日の浅い頃は、熱心な二年生の人達を見るにつけ、よくまあ、飽きもせんとガボランと、練習しはるなあ、よっぽど、暇やネ、ネンナ！、と思った程、私にとって、クラブ活動は、意味を持たなかったのである。今から思うと、クラブというものを、適当に楽しむ為のもの、と理解していたそれ迄のクラブ活動に対する根本的な思い違い

が、私をそれ迄、どのクラブにも、紹介せなかったのであろうと思う。一年の三学期頃から、二年生にかけては、私にとって、ハンドボールは、遊び事ではなかった。明けても暮れても、クラブ活動が私のすべてであり、いきがいであった。しかし、そんな夢中の状態ばかり続かなかった。と言うのは、私のそんな我夢ラの気持に比して、技術の方は、あの期間を過ぎてもうと、一向に、伸びてくれないのである。毎日練習してるにもかゝわらず、ジャンプシュートは、依然として、カが入らない、フォワードの命である、ホーメーションの動は仍らかなかった。そして先輩にも、当然の事だが、「キーパーと代れ！」と、言われて、又我乍ら、自分の能力の限界を感じて、涙を流した事も、しばしばだった。しかし、その頃になると、合宿や練習を通じての友人関係や、又クラブを通じて起る精神的な問題等によって、色々と真剣に考えた。人間、精魂つき果てると、本来のその人の性格の有りの尽か、表われるものである。合宿を通じて、又、苦しい練習を通じて得た友人が、私には、一生の友となる様に思えてならない。合宿の夜、ボソボソと遅く迄、恋愛論を語ったり、又、早く寝ついた者の、寝言に、耳を登ましてクスクス笑ったり、忘れられない思い出が、しばらくとして広がる。夏の合宿では暑いさい中に、水も飲めず、ノドがカラカラにかわいて、それでもホーメーションは手加減されず、又、又走りに走って涙が出る思いをした事も有った。又練習の後ゴロリと高台に仰向けに寝ころび、空を見る。どこ迄も、登みきった青空に、白い雲が、ユックリと流れ、木々の薄緑が目にしみる。そんな時、普段忘れている自然の美しさに、あ然としてしまう。考えてみると、クラブ活動と共に、私の高校生活は、広がって来た様である。勉強一本にしぼらずに、クラブに入って、苦しみ、楽しみ、暴れ、私の若いエネルギーを、思いっきり、発散させ、高校生活を意義有る、ものにしたという事だけでなく、短い、クラブ生活では有ったけれども、以後の私にとっても、多いに、プラスになるものと、信じて疑わない。